

| 語り部プロフィール

●手塚元彦(てづかもとひこ)

昭和 8(1933)年 9 月、満州(現・中国東北部)・奉天(現・瀋陽)生まれ。

昭和 20(1945)年 8 月 15 日、奉天で終戦を知る。

9 月、父親はソ連軍によりシベリアに抑留され、翌年栄養失調で亡くなる。

昭和 21(1946)年 6 月、母親が奉天で病死する。その後、兄妹で孤児院に入る。

年長者だったため、孤児院で亡くなった子どもたちの遺体運びなどをする。

9 月、妹 2 人を連れて、葫蘆島から長崎県の佐世保港に引揚げ。

●成田富男(なりたとみお)

昭和 4(1929)年 12 月、兵庫県生まれ。

昭和 20(1945)年 5 月、満州開拓青年義勇隊の隊員として満州(現・中国東北部)の孫呉訓練所に入る。

終戦後、シベリアのセレクトカンで 8 ヶ月の抑留生活を送る。

抑留中、森林伐採作業等に従事。

昭和 21(1946)年 4 月、オルレンブルグの収容所に移され、建築作業等に従事。

昭和 23(1948)年 11 月、ナホトカから京都府の舞鶴港に帰国。

●丸澤一也(まるさわ いちや)

昭和 5(1930)年 2 月、東京都生まれ。

昭和 19(1944)年 3 月、満蒙開拓青少年義勇軍内原訓練所(茨城県)に入る。

昭和 20(1945)年 3 月、内原訓練所を出発し、満州(現・中国東北部)の勃利訓練所に入る。

5 月、遼陽に移る。383 部隊の後方要員として農作業や警備などを行う。

8 月中旬、大人から終戦を知らされる。

9 月中旬、義勇隊としての団体生活が危険になり、分散して日本人家庭に同居させてもらう。

遼陽の義勇隊は自然解散となる。

食料を確保するため、満州人農家の手伝いや、闇市での商売をしながら、避難生活続ける。

昭和 21(1946)年 7 月、葫蘆島から福岡県の博多港に引揚げ。

●福岡澄子(ふくおかすみこ)

昭和 11(1936)年 4 月、満州(現・中国東北部)・大連生まれ。

昭和 14(1939)年 5 月、貿易商社に勤める父の転勤先パリに移る。

昭和 19(1944)年 8 月、連合国軍の攻勢に伴い、パリからベルリンへと逃避。

昭和 20(1945)年 5 月、ソ連軍の護衛により、ベルリンからモスクワへ。

さらに、シベリア鉄道で満州へ向かう。

奉天(現・瀋陽)で避難生活を送り、そこで終戦を知る。

昭和 21(1946)年 7 月、葫蘆島から山口県の仙崎港に引揚げ。

●加藤正喜(かとうまさき)

昭和 6(1931)年 2 月、石川県生まれ。

昭和 18(1943)年、父が関東軍に配属となり、

満州(現・中国東北部)の公主嶺、新京(現・長春)、奉天(現・瀋陽)へと移り住む。

昭和 20(1945)年 8 月 8 日、平壤(現・ピョンヤン)に移動。

15 日、平壤高等女学校で終戦を知り、その後、集団避難生活を続ける。

その間、石炭運び、遺体運び、傷病者の看護などをする。

昭和 21(1946)年 7 月、家族 6 人で平壤から京城(現・ソウル)へ 1 週間徒歩移動。

京城から列車で仁川へ。

8 月、仁川から福岡県の博多港に引揚げ。

●中島裕(なかじまゆたか)

大正 15(1926)年 5 月、北海道生まれ。

昭和 19(1944)年 4 月、陸軍特別幹部候補生(第 1 期)に志願し、千葉県柏第 4 航空教育隊に入隊。

8 月以降、満州(現・中国東北部)の温春、間島、遼陽、公主嶺等で訓練を受ける。

昭和 20(1945)年 7 月、第 39 飛行場大隊東京城分遣隊に復帰し、航空士官学校生徒の兄と同じ部隊になる。

終戦後、ソ連軍により武装解除される。

10 月、敦化から牡丹江まで 250 キロを徒歩で移動し、牡丹江郊外の掖河で物資の積載作業を命じられる。

11 月、タイシエットの収容所に移され、伐採作業や医務室作業等に従事。

昭和 23(1948)年 6 月、ナホトカから京都府の舞鶴港に復員。

●山田治男(やまだはるお)

大正 14(1925)年 9 月、三重県生まれ。

昭和 20(1945)年 2 月、関東軍第 4 軍 135 混成旅団黒河瓊瑯部隊へ入隊。

8 月 9 日にソ連軍が侵攻し、18 日までソ連戦車隊と交戦。

その後、孫呉にて武装解除され、ブラゴエシチェンスクで抑留生活を送る。

抑留中、荷物の積み下ろし、農作業等に従事。

昭和 23 年 6 月、ナホトカから復員船・信濃丸にて京都の舞鶴港に復員。

●鈴木忠典(すずきただのり)

昭和 3(1928)年 11 月、秋田県生まれ。

昭和 18(1943)年、14 歳で志願し、海軍横須賀海兵団に入団。

水雷学校の訓練科、更に特別訓練科で魚雷艇の操作を学ぶ。

昭和 19(1944)年 2 月、インドネシア中部のセレベス(セラウエシ)島、メナド海軍基地に配属される。

ソロモン諸島などに来襲するアメリカ艦隊に対し、魚雷艇で出撃を繰り返す。

その後、潜水艦乗務員として、硫黄島への物資輸送を行い、ついで、台湾から沖縄への物資輸送の任に就く。

昭和 20(1945)年 9 月、台湾沖洋上で米軍艦により武装解除され、沖縄の収容所へ。

昭和 21(1946)年 3 月、沖縄から長崎県の佐世保港に復員。

●牛窪剛(うしくぼつよし)

大正 14(1925)年 8 月、神奈川県生まれ。

昭和 20(1945)年 1 月、新発田連隊に入隊後、朝鮮・会寧の第 75 連隊に配属。

終戦後、ソ連軍により武装解除され、シベリアのホルモリンで抑留生活を送る。

抑留中、森林伐採作業のほか、鉄道敷設作業に従事。

政治経済講習所で 4 ヶ月間教育される。

昭和 23(1948)年 6 月、ナホトカから京都府の舞鶴港に復員。

●西倉勝(にしくらまさる)

大正 14(1925)年 5 月、新潟県生まれ。

昭和 20(1945)年 1 月に現役兵として出征、朝鮮北部とソ連との国境付近に配属される。

終戦後、ソ連軍により武装解除され、コムソモリスクで抑留生活を送る。

抑留中、土木工事、製材工場、伐採作業、住宅建設、農作業等、様々な労働に従事。

昭和 23(1948)年 7 月、ナホトカから京都府の舞鶴港に復員。

●大矢東(おおやあずま)

大正 13(1924)年 11 月、神奈川県生まれ。

昭和 19(1944)年 9 月、繰上げ徴兵により満州(現・中国東北部)・東寧の第 1 国境守備隊に入隊。

昭和 20(1945)年 3 月、下士官候補学校砲兵科に入り、東寧の砲兵陣地に配属される。

8 月 9 日のソ連軍の侵攻を受け、戦闘を繰り返し、食料を探しながら逃避行を続ける。

昭和 21(1946)年 5 月、逃避行中、八路軍(中国共産党軍)に捕まり、この時初めて終戦を知る。

9 月、葫蘆島から長崎県の佐世保港に復員。

●西崎信夫(にしざきのぶお)

昭和 2(1927)年 1 月、三重県生まれ。

昭和 17(1942)年 9 月、海軍特別年少兵の第 1 期生として、広島県の大竹海兵団に入団。

昭和 18(1943)年 9 月、横須賀の海軍水雷学校に入校し、繰上げ卒業。

11 月、呉軍港にいた駆逐艦雪風の魚雷発射管射手として配属される。

昭和 19(1944)年、マリアナ沖海戦やレイテ沖海戦に参加。

昭和 20(1945)年、沖縄水上特攻では、戦艦大和の護衛として従う。大和が沈没する中、生存者らを救助する。

終戦後、引揚船として使われた雪風に再び乗務し、海外引揚業務に従事する。

昭和 22(1947)年 10 月、復員。

●土屋洸子(つちやひろこ)

昭和 8(1933)年 1 月、鳥取県生まれ。

昭和 11(1936)年、父が満州(現・中国東北部)・公主嶺の農事試験場に赴任のため、家族で公主嶺に移住。

昭和 20(1945)年 4 月、新京(現・長春)の敷島高等女学校へ進学し、寄宿舎に入る。

8 月、ソ連軍の爆撃を受け、寄宿舎から公主嶺の両親の元に戻り、公主嶺で集団避難生活を送る。

昭和 21(1946)年 7 月、父が技術留用者となったため、両親の引揚げが許可されず、

妹と 2 人で日本人引揚団に加わる。7 月末、葫蘆島から福岡県の博多港に引揚げ。

●吉田勇(よしだいさむ)

昭和 10(1935)年 9 月、樺太・敷香生まれ。

終戦間際になって、樺太防衛のため父が義勇軍に、兄が鉄道輸送隊に動員される。

昭和 20(1945)年 8 月 17 日、母と 6 人の子どもたちで、敷香から大泊に列車で移動。

8 月 21 日、第二新興丸に乗船。

22 日、ソ連軍の潜水艦の攻撃を受けて破損するが、北海道の留萌港にたどり着く。

家族で甲板にいたため運良く助かったが、他の乗客の悲惨な光景を目の当たりにした。

同様に攻撃を受けた小笠原丸、泰東丸は沈没し、多くの民間人が犠牲となった。(三船殉難事件)

●上野辰熊(うえのたつくま)

昭和 3(1928)年 3 月、山口県生まれ。

昭和 18(1943)年 10 月、陸軍少年飛行兵として大刀洗陸軍飛行学校に入校。陸軍生徒として基礎訓練を受ける。

昭和 19(1944)年 4 月、飛行兵採用、同校京城教育隊へ配属。九五式中練(赤トンボ)による飛行訓練を受け、操縦技術を習得。

8 月、平壤(現・ピョンヤン)で九九式襲撃機の搭乗員となり、助教要員として訓練や特攻機を受領輸送などに従事する。

昭和 20(1945)年 5 月、鹿児島県の万世飛行場で沖縄航空作戦中の飛行第 66 戦隊に転属、出撃待機するが、沖縄戦が終結したため、大刀洗北飛行場へ転進。

終戦後、部隊は解散し、山口県の叔父の家で生活を送る。

●遠藤尚次(えんどうしょうじ)

大正 15(1926)年 2 月、神奈川県生まれ。

昭和 19(1944)年 1 月、東部第 62 部隊に入隊後、中国・済南の独立歩兵第 111 大隊に配属。

昭和 20(1945)年 7 月、朝鮮・咸興に移動。

終戦後、ソ連軍により武装解除され、船でウラジオストックに運ばれる。

極東地方のイマン(現・ダリネレチェンスク)で抑留生活を送り、森林伐採作業、農作業等に従事。

昭和 23(1948)年 5 月、ナホトカから京都府の舞鶴港に復員。